

# THANKS

BUSINESS NEWS LETTER

(VOL. 211)

発行日：平成27年1月1日  
発行者：有限会社サクスマインドコンサルティング  
連絡先：〒359-0043  
埼玉県所沢市弥生町1792-10  
TEL:04-2907-1715  
E-MAIL：[info@thanksmind.co.jp](mailto:info@thanksmind.co.jp)  
<http://www.thanksmind.co.jp>

## 特集

### 「経営分析の基本⑫」・・・安全性分析（その3）

本誌では、経営分析の基本（数字から会社の状況を把握しよう!）」というテーマを特集しています。今回も前回の続き。

「安全性分析」について説明します。

#### 1. 「安全性分析」の3つの視点と、短期的支払い能力の評価　・・・今回の位置づけ



安全性分析には、以下の3つの視点があります。

#### ①短期的支払い能力

短期（1年）の支払い能力は大丈夫か？

#### ②長期的（潜在的）支払い能力

もう少し長い目を見た場合の支払い能力は大丈夫か？

#### ③資金調達の健全性

資金調達のバランスは大丈夫か？

今回は、最後の「資金調達の健全性」について、確認して行きましょう。

## 2. 資金調達の健全性の評価

マンション販売のチラシでは、「頭金無しでも購入OK！」なんてものも見られます。確かに、「買うことはできる」のかもしれませんが、やはり、こうした買い方では後が辛いですね。

「頭金無し」ということは、購入資金を全て借金でまかなったということ。

当然、頭金を支払った時と比べれば、月々の返済が多くなったり、返済期間が長くなったりします。

私が20年くらい前、マンションを購入した時、住宅金融公庫（現住宅金融支援機構）は、一般住宅融資を「購入資金の8割まで」と制限していました。

当時、頭金に充当するお金が不足していた私。

「そんなケチなことを言わないで、もっと貸してくれたっていいじゃない・・・」

正直言って、そう思ったこともありました。

しかし、多額の借金を背負って、後々苦勞するのは自分自身。

むしろ、そういう「枠」を決めてもらっていた方が冷静になれるし、無理せずに済むのは間違いありません。

当たり前のことですが、何かを購入する場合は、借金に頼りすぎたら危険であり、自分のお金が充てた方が安全です。

これは会社でも同じことです。

会社を運営するためには、多くの資金が必要ですが、それを、どの程度、自分のお金でまかなうことができているのか？

その比率が多ければ多いほど、安全性は増します。

それでは、具体的にどのような指標で評価したら良いのでしょうか？

### 自己資本比率

資産	負債	
①流動資産 …「現金化の流れの中にある」 「1年以内に現金化される」	③流動負債 …「1年以内に返す必要あり」	} 他人の金 (借金)
②固定資産 …「現金化の流れの中にある」 (固定化)されている	④固定負債 …「1年以内に返す必要なし」	
		純資産
	⑤純資産 …「元手」+「儲け」	
合計	合計 (総資本)	

$$\text{自己資本比率} = \frac{\text{⑤純資産}}{\text{負債及び純資産合計(総資本)}}$$

理想値：50%以上

良好水準：35%以上

貸借対照表の右の箱、すなわち「負債および純資産」は、資金の調達方法が書かれていますが、その中身は以下の3つに区分されます。

- ①流動負債
- ②固定負債
- ③純資産

①②は借金で、③は自分のお金です。

ということで、資金調達の健全性は、以下のような指標が通常用いられます。

**自己資本比率＝純資産÷負債及び純資産の合計（総資本）**

一般的には、この比率が35%程度あればOKとされていますが、中小企業では、この数値より低い会社が多いです。

そういう会社は、会社の必要資金を「借金に依存している」ということです。

以前、銀行の「貸し渋り」とか、「貸しはがし」という言葉をよく耳にしました。

ちなみに「貸しはがし」とは、それまで貸し出していた資金を引き揚げることですが、そうしたことは、借金に依存して中小企業にとっては深刻な問題です。

必要な資金が手に入らなくなるわけですから。

### 「債務超過」ってどういうこと？

新聞で「××会社が債務超過に転落した！」という記事を目にすることがあります。

皆さんは、「債務超過」の意味をご存知ですか？

**債務超過会社とは、ひと言で言えば、「自己資本比率がマイナス」の会社です。**

「はあ？意味がわからない・・・」

そう思う方も多いでしょう。

債務超過会社の貸借対照表は、以下のようになっています。

資 産		負 債		
流動資産				
	合計	5,000		
固定資産		合計	11,000	
		純資産		
		資本金	1,000	
		その他	-2,000	
	合計	5,000	合計	-1,000
合計	10,000	合計(総資本)	10,000	

資産の合計が「10,000」で、負債及び純資産の合計が「10,000」でバランスしています。

ただし、右の箱の内訳としては、負債が「11,000」に対して、純資産が「-1,000」。

この場合、自己資本比率は、「 $-1,000 \div 10,000 = -10\%$ 」となります。

純資産の中身は、元手である「資本金」と儲け(利益)である「その他」です。

健全な会社は儲けていますので、純資産が資本金よりも、どんどん大きくなります。

しかし、儲けていない会社はその逆。

累積の損失が積み重なり、資本金を食いつぶせば、純資産はマイナスになってしまうのです。

「よく生きているよね～」

当然、そういう疑問が出てくるのですが、会社の倒産とは、「払うべきお金が払えなくなった状態」。銀行がお金を貸し続けてくれさえすれば、会社は永遠に生き続けられます。

ドラマの「半沢直樹」の通り、銀行の担当者は自分が担当している会社が倒産し、貸し倒れが起きることを何とか避けたいと考えます。

従って、融資しながら何とか会社の再建を応援するのですが、さすがに、そうしたことも、いつまでも続ける訳には行きません。

いつか融資をストップします。

まさに、それは、人間に喩えれば、生命維持装置を外された状態です。


すなわち、「債務超過」とは、自らの殺生を他人に依存していることであり、最も危険な状態なのです。

## 「突然の債務超過」はなぜ起こる？

債務超過は、損失の累積が資本金を上回ることによって起こりますが、「突然の債務超過」というものもあります。

なぜ、そのようなことが起こるのでしょうか？

資産		負債	
流動資産	現預金 50	流動負債	300
	売上債権 100 (売掛金・受取手形)		
固定資産	棚卸資産(在庫) 100	固定負債	400
	その他(貸付金等) 100		
合計	350	合計	700
固定資産	土地 300	純資産	
	建物 200	資本金	100
	設備 50	その他	200
	他 100	合計	300
合計	650	合計(総資本)	1,000



資産		負債	
流動資産	現預金 50	流動負債	300
	売上債権 50 (売掛金・受取手形)		
固定資産	棚卸資産(在庫) 50	固定負債	400
	その他(貸付金等) 50		
合計	200	合計	700
固定資産	土地 150	純資産	
	建物 100	資本金	100
	設備 50	その他	-200
	他 100	合計	-100
合計	400	合計(総資本)	600

上図(左)では、純資産は「300」ですので、自己資本比率は、「30%」でまずまずです。しかし、今回、資産内容を再評価したところ、以下の項目で資産の毀損が見られました。

- 売上債権 → 「50」は回収の見込みが立たない不良債権
- 棚卸資産 → 「50」は旧型型式の在庫で、販売の見込みが立たない不良在庫
- その他(貸付金) → 「50」は返済の見込みが立たない貸金
- 土地/建物 → 高値で購入したもので、現在の価値では「半額」。

ということで、再評価の結果は上図(右)の通り。

この場合、資産が合計「-400」になりますので、純資産のその他は「200」から「-200」減少します。その結果、純資産の合計は「-100」で債務超過に転落です。

このような「突然の債務超過」が無いように、「時価会計」や「減損会計」といった制度が脚光を浴びており、大企業については義務化されています。

ただし、中小企業に対しては、適用義務がありませんので、貸借対照表が実態と異なっている可能性は否めません。

従って、新規取引を検討する際に、当該企業の安全性を評価する時は、貸借対照表を入手し分析するだけでなく、資産内容を経営者からヒアリングし、実態を確認することが理想です。

<次回に続く>